

## 杏林医学会 第6回例会 開催報告

医学部統合生理学教室

大木 紫

第六回杏林医学会例会は平成25年11月25日、医学部基礎棟3階会議室において、東京農工大学・跡見順子客員教授を招聘し、開催された。講演は、「今、社会が科学者に求めること～「いのちと健康」からの提案～」というタイトルで行われた。参加者は39名（うち女性21名）で、後藤元医学部長、甲能直幸病院長にもご出席いただいた。また、医学部以外の3学部からの参加もあった。最初に、感染症学寄生虫学部門の小林富美恵教授より、来年度よりたちあがる研究支援センターについて紹介があり、その設立目的の一つである「女性と若手研究者支援」についての説明があった。引き続き、跡見先生の講演が行われた。

跡見先生は、2007年東京大学教授を退官後名誉教授となられ、その後東京大学特任研究員を経て、現在は東京農工大学寄附講座客員教授、放送大学客員教授を務められている。また、男女共同参画学協会連絡会（加盟68学協会、会員総数41万人）の第9期運営委員長（2010年10月8日～2011年10月31日）を務められ、震災直後の2011年10月31日に男女共同参画学協会連絡会シンポジウムを開催された。このシンポジウムでは震災・原発事故を踏まえ、科学者としての原点に立ち返り自ら反省することが必要であること、3.11以降の人間のあり方を考えるときに女性研究者の積極的な役割が重要となることが提示された。また連絡会は、過去二回の大規模アンケート調査を通して、科学技術分野での男女共同参画の現状と解決すべき問題点を明らかにしてきた。その結果は男女共同参画白書に盛り込まれ、科学技術基本計画のもとで国の具体的な女性支援が開始される根拠になった。そして、第3次男女共同参画基本計画に「第12分野 科学技術・学術分野における男女共同参画」として、初めて理系女性研究者の活躍促進に国として取り組まなければならないことを明記した、独立した章が盛り込まれることに寄与した。しかし、2020年までに

指導的地位の女性比率を30%にするという、いわゆるポジティブアクション2030問題の解決にはまだ遠い道なのであるのが現状であり、さらなる状況改善に取り組まなければならないことが紹介された。

また跡見先生は、ご自身の研究経歴から、「いのちある人間」の科学の大切さを述べられた。先生はもともと、筋肉や運動の研究を行っていたが、その後ストレスタンパク（クリスタリン）や細胞骨格の研究から、卵殻膜の細胞健康科学的研究、ヒューマンサステナビリティウェアの開発、宇宙生物学など、幅広い分野の研究に従事されてきた。その活動は東大定年後の今でも変わらず、常に新しい研究方法を積極的に取り込まれていることが紹介された。そして、病気になる前に「自分のシステムを知ること」により、120歳まで身心一体科学で元気に生き生きと寿命を全うする新領域創成の実現にむけて活動されている、とのことであった。このためには、生命科学や脳科学などの先端科学に基づいて、生物学的に賦与されている加齢の本質、両性の特質等を根源的に捉え直し、原因をあきらかにし、子どもの時からの対策も含めて、戦前に比べて二倍に延長した寿命を元気に全うできる科学・技術分野イノベーションを図るべきと提言された。最後に質疑応答が行われ、結婚・子育てを経験しながら活発に研究を続けられてきたことが紹介され、一同感銘を受けると同時に、見習っていきたいという思いを強くした。

その後懇親会が行われ、その場で女性研究者支援の他大学の現状についてご紹介いただいた。杏林大学も今後取り組んでいかなければならない問題であると、認識を新たにできた。